

大塚楠緒子

長谷川時雨

青空文庫

もうやがて ふたむかし 昔に近いまゑのことでした。わたしは竹柏園の御弟子の一人に、ほ

んの数えられるばかりに、和歌をまなぶというよりは、『万葉集』『湖月抄』の御講義を聴講にいつておりました。すくなくても十人、多いときは二、三十人の人たちが、みんな熱心に書籍の中へ書入れたり、手帖ノートへうつされたりしていました。男子も交る時もありましたが、集りは多く女子ばかりで、それも年若い美しい方たちが重おもでした。

美しい方たちの寄合うなかでも、何時いつまでも忘れぬ印象をとめているという方は、さてすくないものと、今更に淋さびしい思出のなかに、くつきりと鮮かに初対面の姿の目に残っているのは、大塚楠緒子おつかのなほこ女史の面影おもかげでした。

やや面おもな長ながなお顔かほだち、ぱつちりと見張った張りのある一重ひとえまぶち重かさね。涼ひやしいのも、爽さわやかなのも、凜りんとしておいでなのもお目めばかりではありませんでした。明めい晰せきな声こゑ音ねやものいいにも御氣質ごかちがあらわれていたのでしょうと思えます。思うこともなげな、才さいのある若い美しい方の頬ほおの色いろ、生いき々いさとして、はつきりと先生せんせいにおはなしをなさってでした。濃い髪おぐしを前髪まへかみを大きめにとつて、桃割ももわりれには四分よんぶんばかりの白しろのリボンリボンを膝折ひざまり結びむすびにかたく結むすんでかけてお出いででした。二尺じふさくの袖そでかと思うほどの長い袖そでに、淡紅たんきいろ色の袖そでを重かさねた右みぎの袂たもとを膝ひざの

上にのせて、左の手で振りをしごきながら、目を先生の方を正しくむいてすこし笑ったりなさいました。

帯は高く結んでお出でしたが、どんな色合であったか覚えておりません。忘れたのか、それともその時は、ずっと襖ふすまの側に並んで座すわつていましたから、其処そこから見えなかったのかも知れません。召物めしものは白い上布かたびらであらい紺がすりがありました。

その方がその当時、一葉女史を退のけては花圍女史かほと並び、薄氷女史うすらいより名高く認められていた、楠緒女史くすおとは思ひもありませんでした。自分たちと同じほどの年頃のお方かと思っていました、女史は二十一か二の頃でありましたらう。お連合つれあいの博士は海外へ留学なさってお出のころでした。

四年ばかりたちました。春三月に竹柏会ちくはくの大会が、はじめて日本橋俱樂部くらぶで催されたおりにはつきりと楠緒女史はあの方だと思ってお目にかかりました。もうその頃はずっと地味づくりになって、意気なおつくりで黒ちりめんの五ツ紋もんのお羽織を着てお出でした。女のお子のおありのこともその時に知りました。

その後のちも何かの会のちのおり、写真を写すおり、御一緒になつて一言二言ひとことふたことおはなしたこともありました、私の思出は何時いつも一番お若いときの、袖そでを撫なでておはなしをなさつて

いた面影が先立ちます。

容姿かたちも才智ざいも世にすぐれてめでたき人、面影は誰にも美しい思出を残している女史は、数えれば六年むしせ前、明治四十三年に三十六歳を年の終りにして、霜月しもつき九日の夕暮に大磯の別荘やまいにて病のためにみまかられてしまいました。

女史には老たる両親ふたおやがおありでした。三人の女のお子と、その折に二歳ふたつになる男のお子をお残しでした。今は、二人の女のお子は母君ははきみのあとを慕したつて、次々に世をさられました。

女史の遺著は小説、歌文、詩、脚本など沢山にあるなかに、『晴小袖はれこそで』は短篇小説をあつめ、『露』は『万朝報よろずちようほう』に連載したのが単行本になりました。『朝日新聞』にて『空だき』を書きなすつてから、作風も筆つきも殊ことさら更に調べてきて、『空だき』の続稿の出るのがまたれました。が、それは女史の胸に描かれただけで、『空だき』が私の読んだものではお別れになつてしまいました。

晩年に女史が私淑ししゆくなさつたのは、夏目漱石先生であつたということを後に聞きました。その夏目先生が楠緒さんをお思出しになつたことが最近先生のおかきになつた『硝子戸がらすどの中』の一節にありました。無断でそのことを此処ここへ抜くのは悪いと思ひながら、楠緒女史

が生て見えますので、ほんの影だけでもうつさせて頂きたいと、私は大胆にもその事まで此処へ取りいれました。

夏目先生が千駄木にお住居であつたころ、ある日夕立の降るなかを、鉄御納戸の八間の深張の傘をさして、人通りのない、土の上のものは洗いながされたような小路を、ぼんやりと歩いていらつしやると、日蔭町というところの寄席の前で一台の幌車にお出合なされました。セルロイドの窓が出来ない時分であつたので、先生は遠目にも乗っているのは女だという事にお気がおつきでした。車の上の人は無心にその白い顔を先生に見せているのが、先生の眼に大変美しく映つたので、凝と見惚れていらつしやるうちに、芸者だろうというようなお心が働きかけたそうでした。俣が一間ばかりの前へ来たときに、俣の上の美しい人が鄭寧な会釈をして通りすぎたので、楠緒さんだったということに気がおつきなされたのでした。

その次に先生が楠緒さんにお逢いなされたときに、有のままをお話しなさる気になって、「実は何処の美しい方かと思つて見ていました。芸者ではないかしらとも考えたのです」と仰しやられたら、楠緒さんは些とも顔を赭らめず、不愉快な表情も見せず、先生のお言葉をただそのままにうけとられたらしかつたと、懐しいお話がありました。

夏目先生は、楠緒さんのおなくなりの方に、「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」という手向の句をお詠みになりました。

『硝子戸の中』その章をお読みなされた大塚保治博士は、「漸く忘れようとする事が出来かけたのに、あれを見てからまた一層思いだす。」と仰しやったそうです。嘘かまことか知りませんが、正宗白鳥さんが角帽生という仮りの名でお書きなされたものの中に、大学の文科においてなされた頃の博士と、前東京控訴院長大塚正男氏の長女の楠緒さんは、思いあつておむかえなされた仲のように書かれてあつたかと覚えております。そうではなくても女史ほどの御配偶をお先立てなされたお心持ちは、思出さぬようにするのが無理な諦めだと、お察しすることが出来ます。

明治の文壇に、才媛の出身者を多くだしたのは麴町の富士見小学だときいております。岡田八千代女史も、国木田治子女史も富士見小学で学ばれました。楠緒女史もお二人よりは、早くの出身でした。一橋の高等女学校を卒業なされて、博士の留学のお留守中にも、明治女学校に通い、松野フリーダ嬢に学ば英語を専習されました。ピアノは和歌と同門の友橘糸重女史に教えられてお出でした。絵画ははじめ跡見玉枝女史に、後には橋本雅邦翁に学ばれました。いつでしたかずと前に、天女が花を降らせてい

る画えをある展覧会で見うけたことがありました。口の悪い評家はかつぽれ天女などと酷評したことがあってから、公開の席では見ることが出来なくなりました。

多能な女史は料理についても研究なされて、小集会などもよく催されたようでした。

名誉ある学者の夫人、幸福な家庭の女王、作者としては充分な学がくしよく殖たくと貴たつとき未来とをもった、若く美しい楠緒女史は春のころからのわずらいに、夏も越え、秋とすごしても元氣よく顔の色もうつくしく、語気も快活に癒いゆる日ひを待ちくらしして、死ぬ日の五いつか日かまえには、

籠こもり居いは松の風さへ嬉しきに心づくしの人の音おとづれ

と竹柏園主佐佐木博士のもとへ葉書をよせられたりなされました。

墓ほひよう表ひょうを書かれた人は、楠緒さんの御婚禮のときに、結納書をかかれた人と同じ老人だ
ということを聞いて、葬ほうむり式しきの日ひにお友達方は墓表をながめては嘆かれました。

竹柏園先生は、

ゆく秋の悲しき風は美しきぎえある人をさそひいにける

うつくしきいてふ大樹おおきの夕ゆふづく日ひうするゝ野のべ辺べに君をはふりぬ

橘糸重女史は、

重おもき氣けの我身わがみにせまる暗くき室むろに、君がためひくかなしびの曲

胸にそゞぐ涙のひぎき堪へがたし、暗にうもれて君しのぶ時
心あひの友といふをもはゞかりしかひなき我は世にのこれども

峰百合子女史は、

ゆきあひし駒込道はちかけれどふたゞび君に逢ふよしのなき

いたづらに窓の日かげをまもりつゞ、帰らぬ友の行方をぞおもふ

片山広子女史は、

うつくしきものゝすべてをあつめたる其うつそみは隠ろひしはや

さわやかにいと花やかに笑みましゞ、今年の春ぞ別れなりける

書きながすはかなき歌も清らなる御目に入るをほこりとぞせし

千人はゆふべに死にて生るとも二たび来ます君ならめやは

豊島のや千本のいてふ落葉する夕日の森に御供するかな

なき世まで君が心のかゞりけむその幼児をいだきてぞ泣く

掘りかへす新土の香も痛ましよう夕日にそむき只泣かれける

と嘆きうたわれました。誰の胸にも楠緒女史は、美しい面影と思出を残してゆかれました。

まして大塚博士の悲しみはどれ程でありましたろう。御自分でも癒るとばかり信じていた

死の床の枕上には、紙の白いままのノートが幾冊か重ねられてあったという事でした。そういう悲しい思出は数ある楽しかったことよりも深く、博士が腕かかに抱かかえて帰京なされた、遺骨おもひの重味おもひと共に終世お忘れにならないことでしょう。雑司ぞうしが谷やの御墓おはかの傍かたわらには、和歌うたの友垣ともがきが植えた、八重山茶花やえさざんかの珍らしいほど大輪たいりんの美事みごとな白い花が秋から冬にかけて咲きます。山茶花はすこし幽ゆうにさびしすぎますが、白の大輪で八重なのが、ありしお姿をしのばせるかとも思います。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人画報」

1915（大正4）年10月

初出：「婦人画報」

1915（大正4）年10月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大塚楠緒子

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>